

今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

本田由紀著

『教育の職業的意義』

(2009年 ちくま新書)

柔軟な専門性を身につけよ

この本の著者はかねてから、ニート、フリーター、非正規労働者の実態を丹念に追いかけてきた。こうした経験をもとに、誰でもが何かの「専門性」をもつべきだと主張してきた。だから普通高校ではなく、専門高校の拡大強化こそが必要だと主張してきた。ところがこうした主張は様々な批判に出会った。この本の狙いはこうした批判に答えることにある。教育には職業的な意義は「不必要だ」、あるいは「不可能だ」、「不自然だ」、「危険だ」、「無効だ」という論を取り上げて、その一つひとつに反論を書いている。そしてどうして日本では「教育に職業的な意義」が見失われてしまったのか、その背景を語り、今こそ「柔軟な専門性」が必要だと主張している。いったい著者の主張のポイントはどこにあるのか。

迷走するキャリア教育議論

現代ではキャリア教育がブームになっている。若者は「自分のやりたいこと」を発見する必要があるという掛け声のもとに、早い場合には小学校時代からキャリア教育が始まっている。しかし著者はその実際的な効果を疑っている。もともと「やりたいことがわからない」のは、誰も同じであり、その現実を無視して早く自分のやりたいことを探せと強いても、簡単に見つかるわけがない。結局のところこういった「自分探し」は不安感を煽るだけで終わってしまう。

また、たとえやりたいことが頭の中にあっても、今度はそれが実現できるかどうかかわからない。それは至極当然のことで、誰もなりたい職業は思い浮かべられるが、その夢が実現できるかどうかは、やってみなければわからない。だから多くの人は、人生は所詮「賭け」だと思っている。ところが学校も企業も、「勤労観・職業観」が必要だといひ、あるいはどのような職業でも通用する



「汎用的・基礎能力」が必要だと力説する。しかしそれでは具体的にどのような方法でそれを身につけられるのかという点になると、「それは自分で考えて決めろ」としかいわない。このようにキャリア教育が力説されればされるほど、若者はディレンマに陥る。それを著者は「自己実現アノミー」と呼び、すべてを当人の自己責任に丸投げする仕組みだと批判している。

またもう一つのタイプのキャリア教育では、世の中には様々な職業があるのだから、そういう仕事の実態を事実として教える必要があると主張している。しかしこうした「事実漬け」にされても、そこから具体的な目標がつかめる保障はない。さらにはこの現代では誰も「不要にされてしまう不安」が高まっており、黙ってはいはだめで、不当な扱いには「抵抗」する論理・仕組みをもっと学ぶ必要があるという主張もある。労働者の権利、それを保護する制度を学ばせるべきだという論である。これに対して著者は「抵抗」も必要だが、それだけではだめで「適応」することも必要だと説いている。

新構造の開発こそ課題解決のカギ

これまでは日本独特の一括採用方式のもとで、学校が企業にまっさらな労働力を受け渡し、企業がそれを人材に育て上げる仕組みが取られてきた。それを著者は「赤ちゃん受け渡しモデル」と呼び、その方式が成立しなくなった点に、現代の危機をみている。それでは個人が何か専門性を身につけ、それを使って「棒高跳び」をする欧米型のモデルにはどれほど現実味があるのか。著者は「柔軟な専門性」は主張できるが、そのための具体的なカリキュラムは提示できないと正直に告白している。問題の焦点は、個人に棒高跳びを可能にさせるようなカリキュラム開発とそれを可能にする資金計画の開発にあるのだから、それを著者だけが抱え込む必要はなからう。それは教育・雇用全体の課題なのだから。